

## 開場以来取り組んで来た「地域と人」から始まる創造「その先」への期待を膨らませる進化型の作品

文：大堀久美子（編集者）

およそ 25 年余、国内各地域の創造の場を民間、公立に関わりなく取材させていただいてきた。福岡県北九州市は、その最初期から足繁く通っている地域であり、その理由の大部を占めるのが北九州芸術劇場の存在と言っていだろう。

北九州芸術劇場の事業、その内容は多彩かつ多岐に亘っている。

市民の足であるモノレール車中と沿線の各駅を使った演劇公演。地元企業やスポーツチームと連携したオリジナルのダンス創作。地域の高齢者にインタビューを行い、その談話を素材にした演劇制作などなど。

また地域の外から招いたクリエイターとの協働も、劇場がオープンした 2003 年から連続と続いており、殊に第一線で活躍する演出家が選ぶスタンダードやオリジナル戯曲を地域の俳優を含むカンパニーで創作する「北九州芸術劇場リーディングセッション」（05～16 年）。同じく劇場が厳選した劇作家、演出家が北九州をイメージさせる作品を現地に滞在しながらオーディションメンバーと共に創作する「北九州芸術劇場プロデュース」（08～18 年）の両事業からは、観応えのある演劇作品が数多く生み出された。

北九州という土地と人にと強く結びつき、歴史と「今」を創作を介して記録する。それが北九州芸術劇場のミッションであり、創造活動のための原動力だとそれら作品群は雄弁に語り、拙い取材者にもはっきりと感じることができた。



北九州芸術劇場プロデュース「彼の地 II ～逢いたいひ、と。」（撮影：重松美佐）

そんな地域に根差した北九州芸術劇場の、最新進化型の事業が「北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ」だ。劇場とアーティストが 2 年間タッグを組み、地域の人々や表現者との交流など「地域」を知る 1 年目を経て、2 年目にオリジナル作品を創作するという

昨今まれにみる創作最優先の贅沢な企画と言えるだろう。18 年度の第一弾は、劇場の活動初期から多くの事業に参加してきた大阪の劇団太陽族を率いる劇作家・演出家：岩崎正裕を招聘。かつて小倉に住んだ俳人・杉田久女に絡めつつ、仕事や家庭、ライフステージに関連した種々の悩みを抱える現代の女性たちを描いた『まつわる紐、ほどけば風』を制作。20 年 2～3 月に北九州と兵庫県伊丹市で上演予定だったが、感染症拡大のため初日 1 回公演のみで延期に。22 年 2 月に改めての上演を実現させた。



北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ「まつわる紐、ほどけば風」(撮影：重松美佐)

続く第二弾が、同じく「～リーディングセッション」と「～プロデュース」共に参加しているサンプルの松井周による『イエ系』だ。

観劇前に取材に備えていただいた戯曲を読み、はたと膝を打った（という、気分になった）。なるほど、タイトル『イエ系』とは言い得て妙。血縁に関係なく「家族という共同体」をつくることで、様々な優遇措置が受けられる「再家族制度」が制定された近未来の北九州が舞台の今作、その主たるシーンはラーメン店の体を取った研修施設だ。それぞれに事情を抱えた人々が集まり、職業訓練を受けつつ疑似的な家族＝イエを形成するそのことと、横浜周辺を発祥とする豚骨醤油ラーメンのグループ店の総称＝家系がかけられている、なんと巧みな！と。

松井は自身の創作にも、現代日本の「家族」の関係性や形態、社会との境界線などについての批評的な視座での問い掛けを織り込んできたが、今作のための滞在中には、北九州の家族で営む飲食店や子どものための支援施設などを訪れ、取材。その結果、<これまでは「個人を縛るもの、としての家族に反発し、そこから離れる自由を支持する内容を書いてきたが、SNS 上などで起きる「個人対世界」の対立で著しく傷つけられる人が出てしまう現状では、上手く機能する「家族」があることで、動物や昆虫の擬態のように人が身を守る防御になるのでは、と>思考した経緯を経て、『イエ系』執筆に至ったと制作発表で語っている。



家族は、人間が最初に出会い深く関わる血縁に基づいた社会的集団だ。人はそこで最初に、生きていくために演じなければならない役割があることを知る。また本来は、そこに属する者を互いに守る機能があるべきところだが、現在はその多くに歪みが生じ、機能不全に陥っていることは、日々報道される事件などからも明らかだろう。

『イエ系』の登場人物は、そんな血縁のしがらみから一旦自身を切り離しながらも、行政の勧めに従って新たな繋がりを探り、役割を得ようとしている人々だ。祖母、父母、子どもでもある兄妹。互いの過去は詮索せず、今の関係をいかに近しく親密なものにするか、それを仕事に繋げられるかを市の職員に指導されつつ追求する疑似家族の日常は、傍から見ると滑稽でも悲しい。

だが作品が進行するにつれ、それら「家族たらんと演じる様」が、観ている自分の家族関係とそう遠くないもののように感じさせるのが、松井の作劇の上手さだろう。そう、絶対的な庇護を求めて所属していた幼年期を除けば（その庇護さえ望めぬ子どもたちが年々増えているはずだ）、家庭内と言えどなんらかの役割を担わねば家族の一員とは言えないのが現実のシビアさ。ましてや人工的につくられた家族ならば、精神的絆などより役割分担にこそ、繋がる理由は色濃くあるはず。



北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ「イエ系」(撮影：藤本彦)

内心に葛藤を抱えつつ、生き延びるための切実な「家族ごっこ」を体現、或いは支援する、オーディションで選ばれた 10 人の俳優が素晴らしい。松井作品を熟知する俳優から初舞台の者までキャリアに開きがあるというが、そんな違いを感じさせないくっきりとした輪郭と存在感をそれぞれに備え、風変わりな、そう遠くない未来の「家族の風景」を舞台に立ち上げていた。

また製鉄業を町の基盤としていた北九州が、その衰退と共に変わらざるを得ない状況にありつつ、松井はその経緯に町や人の強い生命力を感じたようで、そのことが劇中終盤の台詞に託されていたことも深く印象に残っている。

疑似家族を全うしようとする者、新たな家族さえ捨てて別の道を行く者。選択肢はいくつかあり、それぞれの先にまた日常が続き、明日が来ることをさりげなく置くラストシーンは、北九州の土地と人から生まれた物語が、世界中のどんな土地と人にも当てはまる普遍の物語でもあることを知らしめる。容易に進化は望めないが、簡単に滅びもしない。人間という生き物の往生際の悪さ、だからこそその生命力をことごとく松井の筆致に、北九州芸術劇場が長年取り組んでいる地域と人ありきの作品群、そこに記録されてきた人の営みが重なり、「その先」に続く創造への期待が膨らんだ。



北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ「イエ系」(撮影：藤本彦)